

ベイジークラスの耕地内栽培利用法 (予報)

徳永初彦・茨木和典・小山信明

(九州農業試験場)

立性大型多年生暖地型牧草ベイジークラスの耕地内利用法として、イタリアンライグラス (IR) との作付体系を想定し、ベイジークラスを秋、耕地に播種した。秋播種すると一般に発芽・初期生育が早く翌年から安定した収量を得るが、その反面、幼植物を完全に越冬させることがむづかしいので、IR を追播して越冬株率を高める方法を検討した。

試験方法

- (1) 供試草種：多年性暖地型牧草…ベイジークラス (V)。寒地型牧草…イタリアンライグラス (ツセユタカ) (IR)
- (2) 播種期：V…昭和53年9月9日
IR…昭和53年10月17日
- (3) 播種量：a 当たり 250g
- (4) 施肥量：基肥…a 当たり窒素1.0, 燐酸2.5, 加里1.0kg (成分量)
追肥…刈取り後窒素1.0, 加里1.0kg (成分量)
- (5) 播種方法：V を 20~60cm 間隔に条播し、条間に IR を交互に追播
- (6) 試験区：条間20cm区, 30cm区, 40cm区, 50cm区, 60cm区, 対照区 (無追播)

試験結果と考察

(1) 草丈：秋まきしたベイジークラスは11月下旬まで生長し、越冬直前には草丈約 8 cm, 主稈出葉 4~5 葉期に達した。一方、追播した IR は冬期も生長をつづけ 12~2 月には草丈 15~30cm となり、ベイジークラスを完全に被覆した。

(2) 越冬株数：被覆された各条間区のベイジークラスは越冬株率が高まり、明らかにその効果が認められた。とくに、条間30cm区では対照区の約 7 倍の越冬株率をしめし、m² 当たり 135 株を確保した。この効果は主に株の凍上枯死防止による。気温が上昇した 3 月中旬以降の被覆は条播間隔の狭い 20cm 区では過度となり、枯死する株が現われた。したがって、条播間隔が狭い場合には IR を 3 月中旬に刈取る必要がある。

(3) 乾物収量：各 IR 条間追播区のベイジークラスの乾物重は 1,033~1,666kg/10a をしめし、対照区の 577kg/10a を大きく上回った。とくに、越冬株数を多数確保した 30cm 条間区での増加がめだち、IR の乾物重 853kg/10a と合せ 2,499kg/10a の年間乾物収量を得た。

(4) 以上、ベイジークラスを秋に条播し、IR を条間に交互追播すると、IR の被覆により越冬株数が増加して増収する。条播間隔は 30cm 前後が適当である。

第 1 表 株 の 越 冬 状 況 と 乾 物 収 量

項目 試験区	10月17日	11月24日	4 月 2 8 日				年間10a 当り乾物重 (kg)							
	IR 追播時 (株)	V 越冬始 (株)	IR		越冬株率(%)		m ² 当り株数(株)		IR 早刈区			IR 晩刈区		
			早刈区 (3月 24日刈)	晩刈区 (4月 13日刈)	IR 早刈区	IR 晩刈区	IR 早刈区	IR 晩刈区	IR	V	合計	IR	V	合計
条間 120 区	45	91	(株) 24	(株) 11	26	12	119	55	912	1,546	2,458	1,467	1,355	2,822
30 〃	37	94	40	41	43	44	135	137	833	1,666	2,499	1,565	1,460	3,025
40 〃	39	91	34	31	37	34	84	78	853	1,336	2,189	1,182	1,377	2,559
50 〃	35	95	26	25	27	26	52	50	829	1,484	2,313	912	1,209	2,121
60 〃	39	93	25	23	27	25	41	38	595	1,346	1,941	855	1,033	1,888
対照区	53	90	6	6	7	7	21	21	—	577	577	—	577	577

注) 株数：1 m 間 6 か所調査した平均値、IR：イタリアンライグラス…出穂期 4 月 13 日、V：ベイジークラス。

9 月 9 日 V を条間 20~60cm に条播し、6 条を 1 試験区とした。IR は 10 月 17 日 V 条間に交互追播、対照区(無追播)の数の数値は条間 20~60cm 区各対照区の平均値である。